
あーもー、勝手にやっつけ！！

空猫月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あーもー、勝手にやっつけ！！

【Nコード】

N8280X

【作者名】

空猫月

【あらすじ】

普通の女子高生と、可愛い顔した悪魔と、へたれ男子。学校で繰り広げられる、くだらない争いの数々！！

最初のお話（前書き）

オチがないです。

基本的に、短編集のような感じです。

気が向いたり、ネタが思いついたら、また投稿します。
あまり期待しないで読んでください。

最初のお話

「必殺 登校中に思いついた！！の巻」

「ギヤアアア」

今日も、騒がしい声が聞こえる。

クラスみんなだつて、もう誰も相手にしなくなった。

「瑞穂！みてみて、瑞穂！」

満面の笑みでこちらに向かってくるのは、柏崎波留。さつき、「必殺」とか言つてた奴だ。

実はこの子、黙っていれば誰がどう見たって可愛いのに、本性は悪魔。小悪魔どころじゃない、悪魔だ。

何の悪魔かと言うと、いたずらの。子供っぽいと人は笑うが、これが本格的なのだ。徹底的に人が困る。

「米山あ。」

情けない声を出して、とぼとぼとこちらへ歩いてくるのはへたれ男子、藤川昌太郎。

さつき悲鳴を上げていた奴だ。ちなみにこいつは、波留の標的になつていて、一日に少なくとも3回の被害を受けている。

なんともかわいそうな奴だ。

「米山あ。」

「瑞穂あ。」

わたしの紹介をしておこう。

わたしは米山瑞穂。普通の、ごくごく普通の女子高校生だ。

けれど、この目立ちすぎる二人（いや、目立っているのは波留だけだが）のせいで、あたしまで目立つはめになった。

基本的に、突っ込み役。

「今日は何したの。」

かわいそうな藤川に、とはつけずに聞く。

波留は、誰もが虜になるようなかわいらしい笑顔で、

「糸こんにやく入れた!!」

といった。

絶句して、藤川を見る。

「糸こんにやく、入れられた。」

・・・哀れな。

っていうか、なぜに糸こんにやく。

怪訝な顔をしていたからか、無言で藤川が後ろを向いた。

「ああ。」

背中が、びつしよりだ。さては、波留。こんにやくだけじゃなく、その汁まで入れたな。

いよいよ藤川がかわいそうになって、タオルを渡した。

「糸こんにやく、出しておいで。」

わたしは、この波留のせいで、藤川のためにいろいろと持ち歩いている。

タオルとか、着替えとか、救急箱とか。

「はあ。朝っぱらから疲れるんだから、もう今日のいたずらはなしね。」

一時間目が始まってもないのに、疲れた声を出すわたし。そんなわたしとは裏腹に、波留は不服そうだ。

きっと、まだまだ温めているはずがあるんだろう。
なにをしてくるか、わかったもんじゃない。

最初のお話（後書き）

こんな駄作でも、感想くれたら嬉しいな！

もう過ぎました（前書き）

ちょっとテンションがhighになった時に思いついたお話。
グダグダです。

もう過ぎました

「ハッピー ハロウィン!!」

「いやああああああああああああ!!」

今日も、いつもと同じく悲鳴が響く。

ただし、場所がちょっと違う。

「見て見て、瑞穂ー!」

波留が、満面の笑みで走り寄ってくる。その姿が、いつにもまして滑稽。

「波留。」

「なあに?」

「ハロウィンは過ぎました。」

「・・・」

シユンとする美少女。思わず、いらずらの常習犯だということを忘れて同情しそうになってしまう。

「米山あ。」

遅れて登場。最大の被害者、藤川。

「今日はいつにもまして楽しそうだね。そのままで一日を過ごすといいよ。」

「なんだか、今日は突っ込む気がしない。」

「波留。」

「はあい。」

「藤川はテキトーに流しときなさい。」

「関わりたくなかったんだ、もうこれ以上。」

「米山、ひどい!!」

「川へどんぶらこ」

川に流せとは言っていないが、まあ大丈夫だろう。

今日は11月3日。文化の日。国民の休日。

なにゆえ、こんな幸せな日にこいつら二人の世話をしなければならぬのか。

道行く人が、わたしたちをじろじろ眺める。ここが国道沿いだということをおぼえていた。

「波留。」

「ん。」

「脱ぎなさい。」

読者の皆さま、けっして米山瑞穂は変態ではありません。

今の波留の恰好はというと、

「可愛いでしょ、カボチャのポンチョ。」

オレンジ色で、カボチャがいたるところにプリントされているポンチョ。

「おもしろいでしょ、このタイツ。」

右が赤、左が緑色で、オレンジのボーダーが入っているタイツ。

「このスカートは普通だよね？」

体にぴったりと張り付く黒の、オレンジと白のフリルが可愛らしいドレス。

「もしかして、変なのは帽子なのですか、瑞穂サン。」

今どき魔女でもかぶっていないような、いかにもありがちの黒いトンがり帽子。

「ねえ、どこがおかしいの。」

ここまできて、まだわからないのか。

思わず無言になれば、波留は大きな瞳をつるつるさせてわたしを見る。

「そのチョイスだよ、波留サン。」

観念して、言っただけだ。

「うっそおおおおお！！！」

「うっそ。」

あり得ないちう表情の波留。そんな波留の感性が理解できなくて、目を真ん丸に見開いてしまったわたし。

「米山、俺は無視なんですか。」

固まっていたわたしの袖を引くのは、藤川。

「うっさい！！あんたなんかどうでもいいんじゃない！！！」

あ、言ってしまった。言っただけに後悔することって、多いよね。

見ての通り、真つ黄色のペンキを頭がからかぶせられてドロドロの藤川は、しゃがんで”の”の字を書き始めた。

「ごめんね、そんなつもりはなかったんだ。」

「……。」

「ちょっと、波留のことではいっただけで、」

「……。」

「どうでもいいかと思ってないから。」

「……。」

「瑞穂、帰ろう。」

「そうだね。」

もう、諦めた。藤川なんか、知らない。

その日、藤川がペンキまみれで電車に乗って帰ったのか。

それとも、家まで歩いて帰って足跡が点々と付いてしまったのか。

わたしと波留は知らない。

どっちにしろ、カピカピになったペンキを風呂場でおとすことにはなっただろう。

そういえば、あいつ制服だった。

哀れな。

もう過ぎました（後書き）

ごめんなさい。

書き終わった後、“駄作”という文字しか頭に浮かびませんでした。出来れば、感想を書いていただけると死ぬほど嬉しいです。

あ、この日の波留をイラストに書いてくれる心優しき読者さんはいらっしゃいませんか・・・？

俗にクリパと呼ばれる、難易度の高い集会について。

「メリー、クリチュツ」

「・・・“クリスマス”で囃む人、はじめて見た。」

真っ赤な衣装に身を包み、囃んでしまった恥ずかしさで頬を赤く染める友人に一言。

「やたらと可愛い」

これが世間で言う“ギャップ萌え”なのか。いや、ちょっと違う気もするが。

説明が遅れたが、今日はクリスマスパーティーである。波留の家で開かれている、なんだかこじんまりした集会。メンバーは、わたし米山瑞穂と、おなじみの藤川正太郎だ。

「ねえ、米山。俺は無視ですか」

クリスマスらしいサンタさんのミニドレスを着ている波留の横で、出来るだけ小さくなりながらこちらをうかがってくる茶色い物体、否、トナカイ正太郎。

ぶっちゃけ、どうでもいい。今は、波留が可愛い。

「米山、お前だけが最後の綱なんだよ」

実は、とても驚いたことに、社交的な波留がこのパーティーにはわたしと正太郎しか呼んでいないのだ。家も広いし、友達も多いし、三人だけのパーティーなんてしなくてもよかったのに。友達のいない正太郎に気を遣わなくてもよかったのに。

黙々と用意されたごちそうを口に運びながら、ふと、思い出した。

「CDって、正式名称は何？」

「コンパクト・ディスクコ!!」

・・・コンパクト・ディスクね。ここまで堂々と言い間違える人、はじめて見た。

以上、これからパーティを思う存分楽しんでやろうとひそかにほくそ笑んでいる米山瑞穂から、パーティの途中報告でした。

新年早々

「瑞穂〜」

「何」

「寒いよ〜」

「・・・」

何を言っているんだ、そんなに温かそうな所にいて。

おっと、説明が遅れてしまった。ここはまたしても、波留の家。新年早々、呼び出されたのだ。そして、炬燵で丸まっている。

正直、これほど友人の思考が読み取れないことは久しぶりだ。正月に、炬燵で、なにがしたいのだろう。今、波留はわたしの隣で同じように丸まっている。

「寒いよ〜」

「だから、炬燵の中にいるでしょ。寒くなんか、ないでしょ」

静かな声で、駄々をこねる波留を諭す。

そうこうしていると、

「あ、あ、だあああああああああ！！！！」

うるさい声が聞こえた。藤川だ。

藤川は今、わたしと波留の向かい側で年賀状を書いている。新年明けて、年賀状って。遅すぎる、または早すぎる。

「どうしたの」

いやいやながら体を起こし、尋ねる。構ってやらないと、変に絡まれだしたら面倒だ。

「いや、宛名しくじった」

「・・・バーカ」

途端に、しゅんとなる藤川。だって、これしか言いようがないじ

やないか。年賀状で宛名をしくじるなんて、バカ以外の何なんだ。
失敗するのがわかっていたのなら、パソコンで印刷してしまえばいいものを。

「瑞穂」

くいくいと、トレーナーの裾が引つ張られる。

「寒いよ」

「ああ」

波留は、わたしが起き上がったことによって出来た隙間から入る風に、寒がつていた。

「あんた、極度の寒がりか」

波留の意外な一面、発見。

なんだかんだで、そのままにもすることなく帰った。

波留は一体、炬燵で何がしたかったのだろう・・・？

新年早々（後書き）

オチがなくてごめんなさい。

さあ、始まりましたよ。

さあ、始まりました、新学期。

何もない冬休みを過ごしていたせいか、波留の奇声と藤川の絶叫が懐かしい。

かじかむ指でげた箱を開け、靴を履きかえる。
と、

「ギヤアアアアアア！！！」

「ウキヨキヨキヨキヨ~~~~！！！」

さつそく、困った奇声・絶叫が聞こえる。

今回は何をしているんだろう。周りのみんなは、冬休み明けで感覚が元に戻ったのだろう。いつもなら平気で無視する騒音を、今は何事かと見つめている。

「波留、なにしてるの」

ちょうど目の前に来た波留を捕まえる。

実はこの学校のげた箱、わたしや波留や藤川の教室とは程遠い場所にある。なのに、こんなところまで走り回ってるって……。

「見て見て、瑞穂」

そんなわたしの心配をよそに、満面の笑みの波留。

なんと波留は、その細い腕で大きな水槽を頭に掲げていた。水槽には、

「ナマコ？」

「うん、そう！正太郎の反応が面白くて、今追っかけまわしてるの」

え、藤川、ナマコ嫌いなんだ。

って、そこじゃなくて。

「可哀そうだからやめてあげなさい。ほら、教室行こう」
とにもかくにも、波留を教室に連行した。

「米山、助かったよ」

4時間目が終わり、ほっとした顔を全面的に表に出しているのは、今日朝っぱらから追いかけまわされていた藤川。

「そうですか」

正直、興味ない。感謝するくらいなら、ナマコ見ても叫ばないくらい成長したらいいのに。

そんな勝手なことを思いながら、黙々と昼食の準備。お弁当を取りだせば、

「あ、正太郎！」

どこかで、悪魔の声がした。

「見て見て、ナマコ〜」

「ギアアアアアアアア！」

・・・波留よ、今朝の喜劇をまたも繰り返す気か。

しかたないので、波留を呼ぶ。同じ喜劇を見せられても、観客は白けてしまっただけだ。

「なあに？瑞穂。今、正太郎追っかけるのに忙しいの」
「いいから」

不満顔の波留を、とにかく一時停止させる。

「なにをするの」

止まっただけはいいものの、口が止まらない波留。そんな子供っぽい様子に苦笑しながら、わたしは波留の抱える水槽に手を突っ込んだ。
「え、米山！？」

遠くで藤川が叫んでるのを聞きつつ、水槽の中のナマコをむんずとつかむ。

「え、ちょ、止め止め止め！」

相変わらず、藤川が叫んでいる。

「瑞穂？何してるのってば」

背が低く、水槽を頭の上に掲げている状態では、今わたしが何をしているのかが分からないらしい。

「米山！」

「瑞穂」

二人の声が出たと同時に、水槽から手を出す。そして、その勢いのまま、ナマコを窓の外へと放り投げた。

「うわぁ」

「え、ちよつと瑞穂！」

藤川と波留の騒がしい声を聞きながら、ハンカチで手を拭く。

「二人とも、お弁当くらい静かに食べさせてください」

につこりと笑ったつもりなのに、教室中がしんとした。

後日。

「米山、すげえ」

「カッコイイ」

「男らしいな」

「同性でも惚れるわ」

などとクラス中が噂していたのは、言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8280x/>

あーもー、勝手にやっつけ！！

2012年1月14日16時53分発行